

運が良かったのでチー
ターになります

麦わらぼうし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはある一人のプレイヤーが、運よくゲーム機を手に入れたことを切っ掛けに、運よくあり得ないスキルを手に入れてチーターになったお話である。

※アニメを見て、何となく書いたお話です。

目次

運が良かったのでチーターになります

1

もはやチーターか分からない |

13

運が良かったのでチーターになります

「楽しかったー!」

俺はベッドの上で、つい先ほどまで遊んでいたVRMMOの機械を取ると同時に、感嘆の声を出した。

この手のジャンルに限らず、俺は普段からあまりゲームをしない。しないのだが、近所の商店街で行われていたガラポンによる福引によつて最新のハードウェアが当たったのだ。たとえ偶然であれ、手に入れた以上は使わなければ損だろうと思ひ。少し前に発売された新作ゲーム「New World Online」を購入し、さつそくプレイしてみた。

その遊んだ感想としては、素直に言つて「最高!」である。

とても電脳世界とは思えないほどの綺麗な町並みに、自然、生き物(モンスター)は、まさしく別世界であり、ただ見ているだけでも楽しくてたまらない。

あくまでゲームであるため命の危険があるわけでもないのに、こんな冒険ができるのだから本当に買ってよかったと思う。

「あの人にも感謝しないとねえ」

普段ゲームをやらない初心者である俺には当然、一緒にゲームをやっている相手などいない。なので、街中を右往左往して迷っているときに俺は道を尋ねるために声をかけたのだ。もつとも、その時の俺は話しかける相手をNPCだと勘違いしていた。失礼すぎる。

というか、今思うと「俺は何を考えていたんだろう」と思う。仮に相手がNPCだったとしたら、プログラム通りにしか話せない筈だから、道を聞くことなど出来る筈がないだろうに、いくら初めてだとしても浮かれすぎだろう。

とにかく、俺の話しかけた「クロム」さんというプレイヤーが道案内をしてくれて、初心者だということを伝えると少しだけゲームのレクチャーをしてくれたのだ。本当に感謝である。

「あつ、そういえば大楯の装備は人気がないって言ってたっけ？　少し調べてみようかな？」

そういつて俺はネットで「NWO」について検索を掛ける。すると、いろいろな情報が出てきたが、公式情報ばかりで、大楯が本当に不人気なのか分からない。

「ん？」

そんな風に思っていた俺は、ある一つの記事を見て興味がひかれた。

それは「初心者応援キャンペーン」という項目にある課金システムである。価格とし

てはワンコインで購入できる値段であり、ランダムでレアアイテムを一つプレゼントとある。

どんなのがあるのかと思い検索を掛ければ、フォレストクイーンビーの指輪「レア」が当たったという書き込みを見つけた。そのコメントに対して、お祝いや嫉妬のコメントがついていることからよほどいいアイテムなのだろう。

「一回ぐらい、やってみようかな？」

まだ一日であるが、とても楽しませてもらったのだ。学生の身である俺のお小遣い程度ではあるが、課金という形で感謝を示すと同時に、このコンテンツが長く続くように少しでも手助けになったら嬉しい。だが、俺には課金をするにあたって一つ問題がある。

「課金って、どうやったらできるんだろう？」

普段からゲームをやらない俺は、課金のやり方がわからなかった。やり方を調べて、ようやく課金を終えてた俺は、その面倒くささにもう二度と課金はしないと心に誓った。



「えーと、この「購入」マークを押せばいいんですか？」

「ああ、それで出来る筈だ」

一日経った後、俺は再びゲームにログインして、早速ゲーム内通貨を使ってアイテムを購入しようとした。しかし、ここでまたもや問題が発生。課金はしたが、購入方法が分からない。

おそらく操作ミスをしなないようにするために基本操作とは分けられているのだろうが、どうすればいいのかさっぱり分からなかった。

なので、昨日フレンド登録してくれたクロムさんが、ちょうどログインしていることを知ってヘルプを出した。すると、クロムさんが生産職の人がやっているお店にいるということなので、教えてもらった場所に向かった。

そしてリズさんという人が経営している一軒の店に入って、クロムさんにやり方を教えて貰う。なんか昨日から迷惑かけてごめんなさい。それとありがとうございます！

「か、買えました！ 買えましたよクロムさん！」

「おう。よかったな、ちなみに何が当たった？」

ようやく買ったことに嬉しくなり声を上げたが、中身をまだ確認していない。

そしてクロムさんだけでなく、何も言わなかりズさんも何が当たったのか気になるようだ。なので俺は早速、プレゼントアイテムを確認した。

「スキル作成機？」

「？ なんだそれ、聞いたことないな……………」

「私も初めて聞くわね。名前から何となく想像つくけど、どんなアイテムなの？」
「はい、ちよつとまっつてください。えーと」

俺は「スキル作成機」の詳細を確認する。

スキル作成機

素材を消費してランダムに一度だけスキルを取得することができる（素材が多ければ多いほどレアリティの高いスキルを取得する確率が上昇する）

「えっと、アイテムを使って一度だけスキルが手に入るようです」

「なるほど、アイテムだけどスキルが手に入るのか」

「なかなか面白そうなアイテムね」

そう言われて、確かに面白いアイテムだと思った。しかし、商店街のガラポン、初心者応援キャンペーンと、ランダム要素のある出来事が多すぎないだろうか？

まあ、別に不幸なことは起きていないからいいのだが。

「せっかくなんで、使ってみます」

そういつて俺は、昨日集めた持っているアイテムをすべて素材として消費する。もつとアイテムを集めてからの方がいいのかもしれないが、どうせ遊び半分でした課金なのだ。景気よくやってみよう。

そして俺は、アイテムの使用確認画面の「はい」を押す。すると、新しいメッセージ

画面が表示された。

『スキル「チーター」を取得しました』

『効果を適用しますか？ 「はい」「いいえ』

『……………』

「どうかしたのか？」

取得できたスキルを見ながら黙っていると、クロムさんが話しかけてきた。

「いえ、なんか取得したスキルの名前が「チーター」という名前なんです」

「は？」

俺の言葉を聞いて、クロムさんは間の抜けた声を出す。だがそうだろう、昨日ネットでゲームのことを調べていた時に覗いた掲示板に、この「チーター」という言葉を俺は見た。正確な意味は分からないが、罵倒のコメントに使われていたことから、きっと良くない意味なんだろう？

「いやちよつと待って、チーターっていうのは、要するに不正行為ってことだぞ。どんなスキルだよ？」

「いや、なんか適応するかの確認画面だけで説明がないんですが……………」

「……………じゃあ、とりあえず適応してみたら？ それで要らなければ破棄すればいいだけだし」

見かねたリズさんが、俺にそう言ってきた。確かにその通りだ。要らないスキルは破棄できるのだから、使ってから判断しても遅くはないだろう。

「じゃあ、やってみます」

そう言つて俺は「はい」のマークを押す。すると、確認画面がステータスの画面に切り替わった。



Level

HP 0/0

MP !/?

[STR g7 f f f f f f f f]

[VIT \ (^ o ^) /]

[AGI 99999999]

[DEX ?×\$||%]

[INT ⑨]

装備

頭 [使用不可]

体 [使用不可]

右手【使用不可】

左手【使用不可】

足【使用不可】

靴【使用不可】

装飾品【使用不可】

【使用不可】

【使用不可】

スキル

【チーター】

意味不明だった。というか、バグった？　こういう時はアレだろうか？　運営仕事しろ！と言えばいいのだろうか？

「お、おい。え？　は？　え？」

「えつと、その……だ、大丈夫？」

「？」

何やらクロムさんとリズさんが狼狽えていた。

あれ？　なんか二人とも、大きくなってる？

「お、落ち着け。とりあえず、そこにある鏡をみてください」

「?」

よく分からないが、クロムさんの言う通り、装備を確認するためにいてある店の姿見鏡の方を向いてみる。するとそこには。

「がう（は?）」

ヤマネコのような大きさの『チーター』が居た。

「チーター」

けものはいても のけものはいない



これは一人のプレイヤーが『チーター』になってから少し、ようやく事態に気づいた現実世界のゲーム運営の一室での会話である。

「だあああああああれえだああああああああ!!」

一人の男性職員が叫ぶ。その声に、部屋にいた全ての職員が反応した。

「一体どうした?」

「どうしたもこうしたもあるかつ! 『スキル作成機』のプログラムチェックした奴はど

このどいつだ!」

『スキル作成機』? それなら俺だけど、それってまだ作ってない上位層で手に入られるアイテムだろ? どうかしたのか?」

「お前かつ！ どうかしたんだと？ どうかしたんだよ！ それが使われたんだよ！」

「は？ どうやって……ああ『初心者応援キャンペーン』か……だとすると、上位層の手にはいるスキルでも当たったのか？」

「そのほうがまだ良かったよ！ 『チーター』のスキルが当たっちゃったんだよ！」

『え？』

その言葉に、対応していた男性だけではなく、部屋にいた全ての職員が声を漏らした。
「えっ？ 嘘、なんでだよ……だってあれは」

ようやく事の重大さに気づいて、職員は狼狽え始める。そう、実は「チーター」は本来プレイヤーが取得できるスキルではないのだ。それはバグデータだから？ バランス崩壊を生む調整ミスだから？ それともイベント特典による景品だから？ どれも違う、何故なら「チーター」とは――

「あれは、デバック用のスキルだろ!？」

そう。「チーター」というスキルは、「身捧ぐ慈愛」や「暴虐」のような変身系のスキルに、ペットモンスターのような人外モンスターの動作確認などをするためのもので、本来プレイヤーが入手できるスキルではないのだ。

「どうすんだよ!？」 あれデバック用だから、調整とか完全無視で作ったし、そもそも死ぬようにできてないからゲーム崩壊どころの騒ぎじゃないぞ!？」

「そうだ！ 確実に修正を入れなきゃならん！ だがあのスキルは、もう使用しないからと弄繰り回したから小さいアップデートじゃあどうにもならない！ メンテナンス期間を設けて修正しかないぞ!？」

「だけどこれ、課金して入手したスキルだろ？ どこまで修正するんだ？ ログを見る限り、手持ちのアイテムを全部使って手に入れたのに、下手に弱体するのは酷過ぎるだろ?！」

「いや、それ以前に、このスキルには入れてあるプログラム内容が多すぎる。デバック中ならともかく、他に多くのプレイヤーが同時に遊んでいる状況だと、最悪サーバーが落ちかねない!！」

「お願いだからGMコールしてくれ！ 全力で、即対応するから！ ほら、ステータス画面が意味不明なのは分かるだろ？ 明らかに不具合だろ？ お願いしますなんでもしますから!！」

「それ以前に、他に取得するプレイヤーが現れないように、『スキル作成機』のプログラムを早く修正しろ!！」

「残業確定かよ、勘弁してくれ……」

その光景はまさしく大混乱である。最も、彼らがしつかりと確認しなかったのが原因なので自業自得なのだ。

スキル「チーター」それは、ダブルミーニングで名づけられたスキルであり、その不正行為の『チーター』はゲームを壊してしまう危険性のある犯罪行為であるのだが、まさか自分たちで、その体験をするとは夢にも思っていなかった運営であった。

もはやチーターか分からない

『NWO』第1回イベント。

内容としては荒れそうなバトルロイヤル方式となっていたが、参加者たちは己こそが勝ちあがると開始と同時に雄たけびを上げて戦いに臨んだ。

だが、広大なイベントの一角にある廃墟は、戦場ではなく、狩場となっていた。

「はあっ！ はあっ！」

参加プレイヤーの一人である少年は走っていた。彼は友人たちとチームを組み、一人を10位以内に入れる作戦を立てた者たちの一人である。

チームを組むことは別に禁止されている訳ではない、共に戦う仲間を作ること立派な力だ。否、とりわけ強力なスキルも珍しいスキルもなく、プレイヤーとしての技量も高くない者たちがランキング上位に食い込むには、このような方法を取らざる負えないのだ。

だが、そのような者たちは不測の事態には弱い。

仲間と共に戦うことのメリットは数的有利による役割分担と手数増加である。だが、想定外のことが起きると連携が崩れやすく、チーム全員がまとめて敗北することも

おかしいことではない。

だから、イベント中に現れたモンスターに彼の仲間が全滅したことも別段不思議なことではないのだ。

「ガッ!？」

全力で走っていたせい、転倒した彼は思いっきり顔を強打してしまった。もつとも、ゲーム内なので大きな怪我はないが、視点が下がった彼は目を開いたとき、目の前にいたソレの姿を見ると同時に思考が一瞬停止してしまう。

彼の目の前にいるのは、子猫だ。

大きさにしては、今回のイベントのアナウンスをしていたドラゴンのようなマスケットよりも小さい、とても「無害な子猫」に見える。だが、一目で普通の生き物ではないと分かるだろう。

その子猫には、下半身がなかった。二本の前足だけで体を支えて、少年に向かって歩いてくる。

「ヒイツ!？」

その光景に、少年は小さな悲鳴を上げる。いくらモンスターであろうと、体格差が歴然として少年の方が大きいのに怯え過ぎだと思いかもしれない。

最初は少年もそう思った……………そう、思っていた。

見た目で侮った仲間が全て、この子猫に喰い殺されていなければ。

「あ痛っ!?!」

すぐに逃げようと立ち上がろうとした少年は、再び転倒した。

「なにが、なあっ!?!」

そこでようやく少年は気が付いた。

自身の下半身が、物理的に消失していることを。

少年は、子猫の方に目を向けた。

間違いない、原因はこの子猫だ。自身の状況に、あまりにも姿が似すぎている。だが、

だからと言って何が出来るわけでもない。

すでに武器を喪失し、攻撃魔法も取得していない彼は、残された二本の腕を使って

後退あとずさるしかなかった。

「来るなっ、来るなああっ!?!」

ゲームの中である筈なのに、少年は恐怖のあまり叫んだ。だが子猫は、それに全く躊躇することなく少年に近づいていく。そして後退っていく少年は、ついに木の幹にぶつかって逃げられなくなった。

「何なんだよ! 何なんだよお前はああっ!?!」

半狂乱になって、彼はモンスターに叫びを向けた。モンスターはプログラムだ、返事

をする訳がない。だから、次の出来事に少年は理解が遅れた。

「チーズが、足りないよ……」

意味不明。

だが、子猫は確かに「言葉」を発したのだ。それはつまり、この子猫は――

「プレイヤー、かよ……」

そういうことである。そして、それを理解すると同時に、少年は子猫に捕食された。



【NOW】謎の猫、タマサプローについて【考察】

1名前：名無しの槍使い

スレ立てたぞつと

2名前：名無しの魔法使い

スレ立て乙々

3名前：名無しの弓使い

まずはイベントお疲れ々

そして、一位の姿を見て困惑々

4 名前：名無しの大剣使い

一位がペインじゃないことに、まず驚いて

壇上に猫が昇ってきて意味が分からなかった

5 名前：名無しの槍使い

あのペインを抑えて一位になった猫、いったい何なんだ？

6 名前：名無しの魔法使い

いや、聞いた話によると、ペインどころかランキングの2位から10位の全員が喰い

殺されたらしいぞ？

7 名前：名無しの大剣使い

人喰い猫とか、何それ怖っ！

8 名前：名無しの槍使い

ちなみに俺も、喰い殺された一人です

9 名前：名無しの弓使い

俺も

10 名前：名無しの魔法使い

同じく

11 名前：名無しの槍使い

なので、あの猫について考察していこうと思う。

12名前：名無しの大剣使い

まず、品種は何だろ？

13名前：名無しの大魔法使い

見た感じ、イエネコだけど

14名前：名無しの大剣使い

抱っこしてモフりたい！

15名前：名無しの大槍使い

お前ら……

16名前：名無しの大魔法使い

まあ、実際のところ分からないことだらけだしな

脱線したくもなる

17名前：名無しの大剣使い

まじめに考えると、そもそもカテゴリー的に何になるんだ？

剣？

槍？

盾？

18名前：名無しの大盾使い

カテゴリーじゃなくて、あれはスキルらしいぞ？

19名前：名無しの大弓使い

知ってるのか？　　というか、話していいのか？

20名前：名無しの大楯使い

本人からある程度、話してもいいって言われてる
モンスターに間違われて攻撃されたくないんだと

21名前：名無しの魔法使い

そりゃそうだw

それで、スキルで猫になったって？

22名前：名無しの大楯使い

まあ、他にも色々スキルを取ったらしいが、そっちは流石に教えてくれなかった

23名前：名無しの弓使い

ちなみに、どんな子？　　というか、どんな猫？

24名前：名無しの大楯使い

ぶつちやけ、俺の知っている情報はあんまりないぞ？

まず名前なんだが『福天』

猫になるスキルはNOWが始まった当初の初心者応援キャンペーンで、手に入れた課金アイテムで手に入れたスキルで、スキル名は『チーター』

チーターの姿になるスキルらしく、まったく別のアバターとして扱われるらしい。名

前が『タマサブロー』になつてるのは、猫形態での名前なんだとか

本人曰く、もう人間形態になるつもりはないらしい

礼儀正しくて普通に良い子

25：名無しの槍使い

色々ツツコミどころが多い気がするが、情報感謝

これで考察が進む

26：名無しの弓使い

いや待て、大事なことを聞いてない

27名前：名無しの大楯使い

なんだ？

28名前：名無しの弓使い

男か？ それとも女？

29名前：名前：名無しの大楯使い

そんな気にするとか？

30名前：名無しの弓使い

よく考えてみる。

女だった場合、全裸で女の子が走り回っていることになるんだぞ!?

3 1 名前：名無しの槍使い

！

3 2 名前：名無しの大剣使い

！

3 3 名前：名無しの魔法使い

全裸w(猫)

3 3 名前：名無しの大楯使い

ええ……

3 4 名前：名無しの弓使い

それで答えはっ!?

3 5 名前：名無しの大楯使い

残念、男だ。ちなみに猫形態もオスだそうだ

3 6 名前：名無しの弓使い

神は、死んだ！

3 7 名前：名無しの槍使い

話を戻すが、どうやってペインに勝ったんだ？

3 8 名前：名無しの魔法使い

その時の映像がこちらになります

39名前：名無しの大剣使い

どこから持って来たw

40名前：名無しの魔法使い

普通に公式のアーカイブから見れるよ

ちなみに【タマサブロー対ペイン戦】【タマサブロー対ドレッド戦】【タマサブロー対メイプル戦】

終盤発表の1位2位3位との対戦を切り取ってみたw

41名前：名無しの槍使い

有能w



・タマサブロー対ドレッド戦

順調にポイントを稼いで、2位を維持していたドレッドは、その自慢の機動力で新たな獲物を探していた。

1位であるペインとは知り合いです。その強さはよく知っている。アレに追いつく

ためには、自分の一つ下の3位から点数を手に入れるか、それ以上の速度で残りのプレイヤーを倒すかだ。

その2択において、ドレッドは後者を選択する。

自身の武器は勘の良さと、その機動力だ。3位になるほどのプレイヤーを倒すのは面倒くさく、残りのプレイヤーを狩ったほうが楽だと思い。さらに3位には猛烈に嫌な予感がする。

この勘に逆らってまで一発逆転を狙うほど、ドレッドは自身の勘を軽んじてはいなかった。

それは正しい選択だ、なにせ現状のドレッドの武器では3位のメイプルにダメージを与えることはできない。

故に、彼の考えは正しかった。だが、3位と戦わない選択が正しくとも、残りを探す選択が正しかったとは断言できない。

なぜなら、もう一つの選択先にも、別の意味で敗北が待っていたからだ。

育てたAGIによって高速で走るドレッドは、突如猛烈な悪寒を感じ取り後ろに大きく飛んだ。

そこにナニカ^ネが現れた^コ。

茂みの中から現れた下半身のない子猫。だが、その姿を視界にとらえると同時に一瞬困惑する。このイベントの最中に、モンスターが出てきたのは初めてだからだ。

だが、その子猫が周囲を見まわしてドレッドと目が合った瞬間、さらに強大な悪寒を感じ取り、即座に撤退しようとする。

——が

「なッ!?!」

足の感覚が突然なくなり、浮遊感と共に地面に倒れてしまった。

【半身猫】

猫と視線が合った相手の平衡感覚を一時的に奪い。一定時間、下半身を操作・認識できなくさせる。

速度で戦う相手に、これ以上なく相性の悪いスキルだ。全身麻痺などに比べて上半身で応戦できるからと発動条件が緩すぎる。

そんなスキルを受けて悪寒が止まらないドレッドはすぐさま起き上がろうとした。

しかし、その視界を前に向けたときにはすでに、子猫が自身の目の前にまで迫ってきて

ていた。そして、まるで足があるかのように屈みこんで握りこぶしを作り――

「ドレッドシスベシフオーウ！」

「――ガッ!?!」

強烈なアッパーによって顎を撃ち抜かれて、ドレッドは4メートル近く上空に打ち上げられた。いったい彼に何のうらみがあるのだろうか？

空中において身動きのできないドレッドは抵抗一つできず、下で口を開けた子猫に向かって落ちていき、そのまま喰い殺された。

・タマサブロー対メイプル戦

順位を発表されて狙われたメイプルだったが、極振りした防御力と【毒竜】による毒の範囲攻撃によって一気に大量のポイントを獲得したメイプルはホクホク状態であった。

だが逆に、その力を見せたことによつてほかのプレイヤーが警戒し姿を隠してしまう。残り時間あと僅かというところで、現在メイプルは廃墟にポツンと一人で佇んでいた。

そこに、その悪魔ネコは現れた。

その姿を見て、メイプルは子猫を敵と認識しなかった。

それも仕方ないだろう。ログイン初日に、最初にあつた白兔と遊ぶような子だ。

見た目だけなら子猫も、特に身体に変なところもなく、無害な子猫”に見える。

クリティカルヒットした白兔の攻撃をノーガードで受けられるメイプルには、その子猫が危険な存在だと感じなかった。

故にメイプルは盾を構えずに笑いながら「おいで」と無警戒に手招きをした。その直後――

――ズドン！

「……………え？」

メイプルは爆音を聞くと共に、壁に叩きつけられていた。そして腹部を感じる僅かな痛みに、自身が攻撃されたことによくやく気が付いた。

何が起きたのか？ それは簡単だ。

子猫が、高速でメイプル目掛けて体当たりしてきたのだ。

だがその速度は、おおよそ秒速1800メートル。音速と言われるマッハー3

40メートルと考えると、その速さが分かることだろう。

「いた、い……っ！」

ゲームにおいて痛覚を実装するのは、怪我を負ったことをプレイヤーに認識させるためのものだ。故にショック死するような痛みを発生させることはない（そんなことがあつたら会社が終わる）

なのでメイプルが感じている痛みは、精々指圧程度の痛みだ。だが、今までダメージを受けた回数は少なく、そのダメージも毒によるジワジワとした日焼けのような痛みだった。

故に、突発的な衝撃によるダメージを負ったのないメイプルは、その初めての感覚に戸惑った。

【弾丸猫】

任意の数の専用アイテムを消費して、直線に加速し体当たりする。衝突した対象に、消費アイテムの数×10の固定ダメージを与える。（多段ヒット攻撃）

硬さで戦う相手に、これ以上なく相性の悪いスキルだ。消費アイテム一つによるダメージが少なくアイテムの入手が難しいとしても、固定ダメージによる多段ヒット攻撃

というガッツ系スキル貫通という凶悪さ。

きつと運営がメイプルに毒竜を倒された腹いせに作ったスキルに違いない。

メイプルのHPは最大で40、現在は30に減っていることから、アイテムを一つ消費して攻撃されたようだ。アイテムは攻撃する前に消費されるので、慎重に使っているのだろう。

子猫はメイプルに再び狙いを定める。

目が合った。

倒れこんだメイプルは下半身が動かなくなった。

逃げられない。

盾は離れたところにあって防御もできない。

そして何より、こわい。

初めて受けたタイプのダメージに、メイプルは目の前に居る子猫が毒竜よりも恐ろしい存在に見えた。

戦つてはいけない。見つかつてはいけない。機嫌を損ねてはならない。

そして現状、どうにもならない。

「うあ……」

小さなうめき声に、答えたのは子猫からの爆音だった。あまりの速度に反応できなかったメイプルは、腕で視界を塞ぐことすらできずに顔に向かって飛んでくる子猫に喰い殺された。

・タマサブロー対ペイン戦

最初から現在まで1位を維持し続けてきた紛れもないトッププレイヤーのペインは、2位とのポイント差に慢心することなく、プレイヤーを狩り続けていた。

油断なく、だが気負わず、そしてゲームを楽しみながら、鍛え上げた己のプレイヤースキルを遺憾なく発揮し戦い続ける。

だが、その戦いも終わりのようだ。

そこに怪物ネコが現れた。

「やあ、どうやら俺と君で最後のようだね」

ペインは目の前にいる自身を除いた最後の参加者に声をかけた。

つい先ほど、運営からアナウンスが流れたのだ。

残り時間10分、なんと生き残ったプレイヤーは2人、ペインと子猫のみであると。つまり他のプレイヤーは、この2人以外は全滅した。

故にこれは、事実上の最終決戦。

取得しているポイントはペインの方が上だ。なので戦わずに逃げてれば、自動的にペインが1位になれる。だがペインは、その選択肢を捨てた。

そんな1位になんの価値がある？

逃げ続けて1位になってなんの意味がある？

そんな勝ち方、まったくもって面白くない。

ペインはゲーマーだ。ゲーマーはゲームを楽しく遊ぶものだ。故に逃げる選択肢など、最初から無い。

ペインの言葉に、子猫は小さく頷くと臨戦態勢になる。猫は本来肉食獣、それは獲物を狩るための姿。それを見たペインも、己の聖剣を構える。

「言葉は不要か。なら、行かせてもらう！」

そういうと同時に、ペインは駆け出す。だが、踏み込みこそペインの方が早かったが、速さは子猫の方が上だった。

——ズドン！

爆音と共に凄まじい速度で突進してくる子猫。

「——ッ！」

だが、その突進を、あろうことかペインは見て——避けた。

それはもはや、人間の反射速度ではない。彼が掲示板などで、動きが人間を辞めているとよく言われているが、その動きはもはや人間を超えている。

戦いの映像を見ていた第三者からは、ペインが動こうとした次の瞬間には、身体を横にずらしたペインと、爆音と共にペインの後ろで土煙が上がったことだけが見えていた。

まさしく刹那の攻防。

それを制したのはペインだった。だが、子猫を斬れた訳ではない。

今ので、速さは分かった。次は、斬る！

そしてペインは土煙の中から獲物を探す。

目が合った。

次の瞬間、ペインの身体が崩れ落ちる。そしてそれと同時に——

ズドン！

爆音と共に土煙が空気に押されて円状に晴れた中から子猫が突進してきた。だが――

「――ッ！」

崩れ落ちると同時に下半身が使えなくなったことを理解したペインは、片腕だけで身体を支えてその場から飛び退いた。

さらに飛び退いた先にある柱の蔦つたを引き千切り、それを身体と柱に巻いて体勢を固定した。

どこのクーパーリンだ。

そしてペインは、目を閉じた。

状態異常の原因が、視覚によるものだと判断したからだ。

もう視覚には頼らない、頼るのは聴覚だ。

すでに、その速さは理解した。ならばもう必要なのは――音だけでいい。
あとは己の力を信じ、ただそれを叩きつけるだけだ！

一瞬の静寂、だが永遠にも感じられる悠久の時間。

映像見ている観戦者たちも固唾を飲んで見守る。そして――

——ズドン！

爆音と共に、戦いの火ぶたが切られた。

何千倍にも引き延ばされたペインの感覚は、その音を確かに捉える。

「——此処だッ！」

ペインから放たれた【断罪の聖剣】は、確かに突進してくる子猫の頭を捉えた！

——だが

——ガイイン！

確かに子猫の頭を捉えたペインの聖剣は、当たると同時に——弾き返されてしまった。

そして——

「俺の、負けか……」

突進してきた子猫の直撃を受けたペインは、その言葉と共に柱にもたれ掛かりながら光の粒子となり、散った。

それと同時に、イベント終了のアナウンスが流れる。こうして『NWO』第1回イベントは幕を閉じた。

以上が、名無しの魔法使いによつて編集されたタマサブローの対戦映像である。この映像を見た多くのプレイヤーは、しばらくの間、子猫の話題で持ちきりだった。

ちなみに、怯えているメイプルの映像の再生数が異様に多かったが、そのことを本人たちが知ることはなかった。



ところ変わって、森の中。

第一回イベントが終わって調整を受けた後「チーター」のスキルを得た彼は、新しいスキルを求めて彷徨っていた。

最後のペインとの闘い、あれはスキルによる防御ではない。メイプルのようなVITによる耐久でもない。

あれはもつと根本的なシステムによる現象だ。

【弾丸猫】による突進に合わせて、ペインが攻撃を当てたと思われたとき、すでに子猫の攻撃はペインに届いてHPを0にしていたのだ。

HP0、すなわち死んだ相手の攻撃をシステムが無効にした結果、子猫に弾かれたように見えただけである。

今回、彼がイベントに優勝できた要因である。「チーター」以外の3つのスキル。

【半身猫】【弾丸猫】そしてもう一つの「無害な子猫」によるものだ。

【無害な子猫】

体格を半分にする代わりに、攻撃判定を元の体格の2倍の範囲にまで拡大することができる。

冷静に戦う相手に、これ以上なく相性の悪いスキルだ。相手の攻撃を見切ったと思つたら、逆に罠に嵌まる。

見た目通りの射程ではなく、しかも範囲内なら可変式。おまけに間にある障害物は無視することができる。

このスキルにより、ある大楯使いのプレイヤーは自慢の大楯で突進を防御しようとして、盾越しに喰い殺されたりしていた。

今回のメンテナンスで、修正を受けて1日の使用回数に制限が付くほど凶悪なスキルだ。

いやもつと弱体化しろ運営、下手すると【悪食】より凶悪なスキルだ。

とにかくこのスキルによってペインの聖剣に斬られる前に【弾丸猫】によってHPを削り切ったのである。ちなみに残ったアイテムを全部消費したので、あの一撃で倒せなかったら敗北していた。

メイプルにも盾でガードされていれば【悪食】により敗北していた可能性もある。もつとも【無害な子猫】で接触前にHPを削り切られる可能性の方が高いが。

ドレッドに関しては【半身猫】で動きを止めなければ、勘で避けられてアイテムを失ってしまう可能性もあった。

故に、彼が勝てたのは所見殺しによるところが大きい。そして、それらのスキルを手に入れることができた彼自身のとてつもない運の良さによるものだ。

今回の勝因である3つのスキルは、彼が【チーター】のスキルを手に入れてから自力で見つけたものだ。

【チーター】を入手してすぐ、彼は運営に連絡をいれて不具合を修正してもらったが、しばらくの間、ゲームをプレイすることができなかつた。

そのお詫びとして、運営は彼の要望を1つだけ叶えてくれた。

別に理不尽な内容ではない。ただ、チーター形態のまま言葉で話せるようにしてほしいというだけだ。それくらいならと、運営は了承してお互いに win-win の関係のまま終わり、運営から放置された彼は、とんでもなくスキルを入手したのだ。

運営仕事しろ。

「こやこや！ いらつしやい旦那さん！」

目の前に居る二足歩行する、石のピッケルを持った猫に挨拶される。

ここは森の中にある彼ら『悪魔猫』と言われる者たちの隠れ村である。

運営から放置された彼は、偶然この場所を見つけてスキルを手に入れた。どういう訳か、彼らからするとプレイヤーは旦那さんと呼ばれるように設定されているらしい。

「またあの人に会いに来たのかにや？ 若いつて良いにや〜」

からかいながら優しい目を向けてくる猫の言葉を聞いて、彼は曖昧に笑った。

この村を見つけてからと言うもの、彼はある一匹の猫のもとに毎回通っている。だがそれは、恋愛感情によるものではない。

その猫から与えられるクエストをクリアすることで、スキルを貰えるからである。

クエスト内容としては、雲の上にまで伸びる高い塔を登って、そこにいる猫の仙人と戦えだの。

攫われた子猫を、紳士服を着た猫と大型犬ほどに巨大な猫と共に奪還しろだの。

塔に閉じ込められた魔術師を倒せだの。妹の猫を鍛えてほしいだの色々だ。運営は1回、偉い人に怒られる。

そんな訳で、今日も彼は会いに来た。

石の上に佇んでいるその猫は、厚手のコートを羽織っていることで全身の殆どを覆われ、そのコートには何かの紋章が付いている。本人（猫？）曰く、かなりのお偉いさんらしい。

「ようやく来たな。では早速、次の依頼を与える。言っておくが、くれぐれも内密に頼むぞ？」

「分かりました！」

元気よく返事をする、彼はクエストを受注する。

どうやら今回の依頼は、ある井戸小屋で引きこもっている猫の話し相手になってほしいということだった。

今までのクエストに比べて随分と簡単なような気がするが、彼は気にせず指定された小屋に向かう。

到着した彼は小屋の中に入ると、そこには一匹の猫が瞬き一つせず、こちらをジッと見つめていた。

「こんにちは、俺は福天——じゃなくてタマサブローって言います！」

「ねこです」

「ねこさんですか！　ねこさんはいつも、ここに居るんですか？」

「ねこはいます」

「そうですか。俺はここの村の猫じゃないですけど、どうか友達になってくれませんか？」

「よろしくおねがいます」

「はい！　じゃあ改めて、タマサブローです。よろしくね！」

「ねこです。ねこはいます。よろしくおねがいます」

　楽しそうに笑う彼はまた、おかしなスキルを手に入れそうだ。